

<東南文化>2010 年第 3 号主な論文の要旨

1. 中国における文化景観の世界遺産登録の推薦戦略について(陳同濱)

要旨:<世界遺産リスト 空白を埋める—未来行動企画>(Gap Report)と<顕著で普遍価値とは>(OUV Report)は近年において世界遺産保護領域における二つの重要な文献だ。Gap Report において世界遺産価値の比較分析と認定によって新しい骨組概念即ち分類の骨組、時間の骨組そしてモチーフの骨組がまとまった。OUV Report は世界遺産の"顕著で普遍価値"の定義を修正し、その"普遍性"と"持続性"をより一層目立たせる。この二つ文献の要求と中国文明の性格を基にし"文化景観"を中国の世界文化遺産リストの候補に推薦するのは中国の特色に合致すると思う。我が国は全人類と文明の保護の意識をもって遺産の価値を新たに認識し、"文化景観"類の遺産の研究と世界遺産リスト登録の推薦を強化すべきだ。

キーワード:世界遺産リスト 中国文化景観遺産

2. 歴史時期考古学研究方法について

——安陽西高穴村漢魏大墓墓主の推定から考える(許永傑)

要旨:2009年河南省文物局は安陽県西高穴村で緊急調査した漢魏時期大墓が魏武帝曹操の高陵だと断定したと発表した。社会大衆はこのニュースをめぐって激論している。論争対象の拡大に伴い論争の対象は墓主の身分認定を超えて考古学の科学性と権威性まで及んだ。曹操墓をめぐる論争を考えると、考古学年代学、出土文献と伝世文献との相互に参照し、人文科学の"ひとつ証拠が信じ難い"などの面で歴史考古学方法を検討すべきだ。そうすると、考古学自身の建設、社会大衆が西高穴大墓墓主の断定結果の不信感として考古学に対する疑惑を解消するに役に立つ。

キーワード:歴史考古学 方法論 曹操墓

3. 句容春城元嘉十六年墓について(鎮江博物館 句容市博物館)

要旨:元嘉十六年墓は凸字形磚室墓で、墓室内に木棺が二具あり、合葬墓だと断定できる。紀年銘をもつ墓磚が一枚、草書の書かれた墓磚が二枚見つかった。副葬品には磁器、陶器、漆器、木器、銀器、瑠璃器などがある。瑠璃杯と青磁鶏首壺と銀盤そして二枚の草書の書かれた墓磚が国家一級文化財に指定された。瑠璃杯はササン朝からの舶来品で非常に珍しい。

キーワード:句容市 元嘉十六年 墓葬

4. 南京市紅土橋出土南朝塑像および相關問題について(王志高 王光明)

要旨:南京紅土橋から出土した南朝塑像は六朝都市である建康地区において初めて見つかったものだ。分析によって遺物の出土地点は南朝の延興寺跡と関係をもつと考えられる。製作技法を考えると、紅土橋南朝塑像は素地に彩色を飾り、上薬を施し、窯に入れて焼くという工程を経て出来上がったものだ。それらは同時期における百濟塑像と類似し同一製作技法伝統に属し、北朝塑像と明らかに異なることがわかる。よって南朝仏教文化は百濟への影響は深いと思われる。

キーワード:南京紅土橋 南朝塑像 延興寺 製作技法 百濟 北朝

5. 南朝墓葬に見られる仏教要素について(韋正)

要旨:仏教は墓葬に浸透するのは仏教文化と葬送儀礼において重要な現象だ。南朝時期には、仏教要素は普遍的に墓葬に現したが、墓によって仏教要素の象徴意味が異なる。20基南朝時期の墓をまとめて見ると仏教要素として仏教人物の姿を呈する仏像、僧侶、飛天、伎楽、供養人物、獅子、仏教の象徴物としての雜器、仏塔などが見られる。

キーワード:仏教要素 南朝

6. 六朝都市の仏教寺と仏塔の基本研究(賀雲翱)

要旨:六朝都市の仏教寺と仏塔の具体形態についての系統的な研究はない。六朝仏教寺の基本要素には寺門、仏殿、講堂、禅堂、塔、食堂などがあげられる。東吳時期の仏教寺は中国伝統的な方形中庭を保ち中に多層の樓閣式仏殿又は仏塔が建てられる。東晋から南朝初期まで六朝都市に"平地式"又は"規整式"仏教寺と"山林式"又は"自由式"仏教寺が二種類ある。その主流的な配置は韓国、日本に見られる6~7世紀の仏教寺に似ている。六朝都市の仏塔は南方地区によく見られる木造ものが主流で、鮮明な特色を持っている。日本法隆寺の5重塔と法起寺の3重塔には中国六朝都市の全木造型仏教寺の基本特色を持つべきだ。

キーワード:六朝都市 仏教寺 仏塔

(翻译:黄建秋)